

終章

「しーずくつ、何見てんの！」

昼休み、雫が窓際の自分の席でぼー、と空を流れゆく雲を眺めていると、元氣よく亜里砂が話しかけてきた。

「……え？」

いきなりのことで、頭が働かない。しばらくそうして呆けていると、亜里砂は、もーっ、と雫の肩を強くバンバン叩いた。そして、笑ってこう言う。

「まーだ引きずってんの？」

「……え」

ぎくり、として雫は何も言い返せない。

あはははは、と頭を掻いて、亜里砂は続けた。

「そりやまあ一方的に同盟を脱退したのは悪かったと思ってるけどさー、仕方ないじゃん、おっぱいおつきくなっちゃったんだから」

今さら縮めるわけにもいかないしねー、と困り顔だか喜び顔だか分からない微妙な表情で、彼女は喋り続けている。

「……ああ」

そういえばそんなこともあったな、と雫は机に肘をつき、顔を載せる。そして、ようやく今に至って、教室のざわざわとした喧騒が耳に入ってきた。時折こうしてつい、どこかここでない場所を見ってしまう。

そんな雫の態度に当惑したらしく、亜里砂は尋ねた。

「え、何、それじゃないの？」

「いや、まあ、その……色々あって」

訊かれても、説明のしようがなかった。

しかし、雫にしては珍しい曖昧な返事にかえって興味を持ってしまったらしい亜里砂は、何々、どしたの、と更に食い下がる。

「何かここんとこ雫、いつそうクールってゆうか、憂いに満ちた美少女、んー何だろ、諸行無常って感じになってる気がしてさ。カッコ良さ三割増しで女の子たちもキヤーキヤー言ってるし、私としても大いに歓迎なんだ

けど。ただ今までとはちよつと質が違うから、割と心配だったんだよねー」
「なるほどね……」

さすがに亜里砂はよく見ているな、と思う。

「何、部活の方？ 顧問に怒られたんだって？ 太刀筋が教えたのと違うとか、全体的に雑になつてるとか。でも強くなつたって噂だけど」

「まあね」

実戦経験を積んでしまったのだから仕方がない。

「でもなんか、ちよつと前よりはだいぶ取つきやすくなった感じはするよ。みんな言つてる。真面目一徹な雰囲気になつて、物腰が優しくして、話しかけやすい感じになつたって。ちらほら笑顔も見えるし、ビックリだよ。だからさ、その物寂しげな空気だけ取っ払ったら、素材はいいんだから、男なんか入れ食い状態、てか彼氏の二、三人ぐらい余裕」
「ふうん」

——じゃあ、ずっとこのままでいるかな。

そんな意地の悪いことを、雫は内心考えた。

すると、はっ、と勘づいたように亜里砂は口元に手を当てた。

「あれ、もしかして恋愛関係？」

雫は視線を逸らして応えない。

「えー何、恋の悩みだったわけ？ 天下の御剣雫が？ いやあ、悪いけど興味あるわ。何々、相手は誰？ どんな人？ 何部？ カッコイイ？ いやむしろ、あえて奇人変人の類？」

雫は黙ったまま少しだけ目を細め眇めて、亜里砂を見返した。

「だからそういうところが前以上に侍ばいって……あ、ひよつとして失恋？ だったらゴメン。でもそういうのって、いっそ喋っちゃった方が楽になれるっていうか、私の豊富な経験上そうだから。さあ御剣さん、今のお気持ちは？」

「おっぱいおっきい人には分かりません」

さらっとそう言い返すと、ふう、と息を吐いて、雫は席から立つ。

両手を上げて、うーん、と伸びをする。

——こんなことではいけないんだろうな。

雫は、きよとんとしている亜里砂の顔を見た。

「食堂行こっか」

そう言つて雫は、ちよつと笑つてみせた。

「お祖父ちゃん、来たよー」

そして、放課後。

今日も雫は祖父に呼び出され、御剣江戸美術館に来ている。

正直に言えば、色々思い出すのであまり来たくはなかったのだが、かといつて断る適当な理由も思いつかなかった。自転車を駐車場に置くと、いつも通り正面玄関を通つて中に入るが、例によつて誰もおらず、静まりかえっている。今日もまた休館日である。来るときはいつも休館日なので、本当に開けることがあるんだろうか、などと雫はしばしば訝かしむ。

「お祖父ちゃん……？」

祖父も見当たらない。雫はそうして探しながら、どんどん奥へと歩いていった。

普段と変わらず、古い刀だの襖だの着物だのといった美術品がライトアップされて並んでいるが、雫も以前よりはほんの少しだけ、それらに親近感を抱くようになった。ご大層に扱われているのが滑稽に見えるほどだ。何しろついこの間まで、自分も使っていたのだから。

そのまま進んでいくと、仕舞いに一番奥、先日雫が倒れていた展示室まで辿り着いてしまった。雫は、敷居の前で立ち止まる。

やはり入るのには、少しためらいを感じる。

「お来たか雫、こっちじゃ」

中でそう言う祖父に促されて、仕方なく雫は、足を踏み入れた。

「いやいや今日も、新しい品があつての……」

うきうきした調子で祖父は言い、持ってきた段ボール箱の中からいそいそと木箱を取り出しては傍らに置いている。呆れて雫は溜息を吐いた。

そこで雫は、台の上に何も載っていないことに気づいた。

恐る恐る、雫は尋ねる。

「……あれ、泡沫絵巻は？」

「仕舞ったよ」

あっさりと、祖父はそう言った。

雫は啞然となる。

「なんじゃ、そんなに気に入ってあったのか？ あれから一度も見に来なかったから、てっきり飽きてしまったのかと思って、昨日仕舞ったよ」

作業を続けながら、祖父はそう応えた。

そう、なんだ、と雫は、激しく動揺する心を抑えながら辛うじて言った。

また見たいなら出してもいいぞ、と言う祖父に、いいよいいよ、と首を横に振る。そうだ。何も、惜しむ必要はないのだ。

あの後何度絵巻を見つめても、戻ることは出来なかったのだから。

小さく吐息を漏らして、雫は気持ちを切り替えた。

「それで。今日は何をすればいいの？」

「いや、今日は特別何かを手伝って貰おうと思って呼んだわけではないんじゃが。ちよつとよいものがまた手に入ったから見せてやろうという、祖父の心意気」

飄々と喋りながら、祖父は先の台の上に、細長い木箱を置いた。

「じゃあお祖父ちゃんは向こうで用意してくるから、ここで大人しく待つておるんじゃぞ」

そう言つて祖父は雫に背を向け、部屋から出て行こうとした。

何の気なしに雫は、目の前の台上の箱の蓋を開ける。

「分かりました。ところで、これは何？」

中に入っていた巻物を徐ろに広げながら、雫は問うた。

出て行き様に、祖父は気軽な口調で応えた。

「ああ、それはの……」

「極彩色虚言泡沫絵巻、弐の巻じゃ」

「え」

思わず雫の手が止まる。

開かれた絵巻物は――。

間違はなく雅楽、いや、颯太の画風であり、前とは全く違う絵が描かれていた。

「いやあ歌方雅楽、随分描いておったようじゃぞ。その思い、一巻きだけでは到底尽きなかったようじゃ。国内に散逸しておって具体的に全部で幾巻になるかはまだまったく分からんのじゃが、わしは全巻収集を目指すぞ。とにかくそれが、とうとう手に入れた二巻目。今度も面白そうじゃな」

雫は動けない。

絵は、壺の巻以上に生き生きとしている。

世界の息吹が感じられる。

「前ので雫が気に入った様子じゃったから、今日も見せてやろうと思ってな。こうして呼んだんじゃよ。よかったじゃろ？ じゃあお祖父ちゃんは、行ってくるからの」

祖父は部屋から出て行った。

雫は、絵巻から眼が離せない。

心湧かせる物語。

気持ち浮き立つ妙なる絵姿。

虚言真実の限りを越えて、

何時の時代も、忘れず。

永久に生きるは、

夢と幻。

雫の脳裏には、得意満面な颯太の、

眼を輝かせた無邪気な笑顔が浮かんでいた。

――あいつ。

そう思って頬を膨らませてから、

雫はそっと、微笑んだ。

覚悟を決めると、再び絵巻に眼を落とす。

そして視界が、
ゆらり、と歪んだ。

↓
了